

〈原著論文〉

台湾におけるキャンプの変遷に関する研究

—キャンプに関する諸団体の動きとそのキャンプ活動を中心として—

陳 盛 雄*
栗 田 和 弥** 麻 生 恵**

The Study on Taiwan Camping Development

—Focused on Camping-related Groups and their Activities—

Morio S. H. CHEN*
Kazuya KURITA** and Megumi ASO**

Abstract

The study is aimed at the various aspects of the development process of contemporary (1950-95) Taiwan camping activities, trying to find those factors that contributed, or hindered, its progress and thus hope that we can provide some reference data to the future development of camping in Taiwan. Since 1949, when nationalist Kuo-Ming-Tang's government moved to Taipei, contemporary Taiwan camping, under the influence of the environment at that period, has developed its unique "boy scouts education" type of framework. It was put into the junior high school curriculums for an hour per week course. Therefore, most of the studies on contemporary Taiwan camping were centered on boy scouts education, and not mentioned on general camping activities.

An approach of this study is started from the analysis of founding of the various camping-related groups. Then focused on the camping activities of each period in Taiwan. From the publications, data and the personal statements of these camping professionals, Taiwan camping activities are able to divided into the following three periods by the study:

- 1) 1950-70: Training and educational camping period.
- 2) 1971-87: Group and recreational camping period.
- 3) 1988-current (1995) : Family and leisure-time camping period.

Key Words: Taiwan camping, development of camping, camping activities, camping education

* 中華民国露營協会 The Camping Association of the R.O.C.,

中華民国オート・キャンプ協会 Federation of Camping and Caravanning of the R.O.C.

** 東京農業大学農学部造園学科 Department of Landscape Architecture, Tokyo University of Agriculture
受理：1996年10月7日

1. 研究目的

中国大陸は、1912年に孫文が清朝を倒して中華民国を樹立した後も尚、1950年の中国共産党による制覇に至るまで「動乱の時代」が続いた。この間、中国人は戦争と破壊とそして恐怖の中で暮らしてきた。1945年第2次世界大戦終戦後、これから国家建設に移ろうというときにまたもや内乱に陥り、国民党と共産党は同胞同志が互いに戦い、1949年に国民党が敗れて国民政府は台北に遷都した。

台湾は、終戦後から国民党の台湾遷都に至る約5年間は無政府の状態にあった。1947年に起きた台北市民と警官隊の衝突、流血の「二・二八事件」の発生により台湾島内は一層の恐怖社会に陥ったが、1949年4月18日に「動員勅令時期臨時條款」（一種の戒厳令）が公布されてようやく政局は落ち着き、治安が保たれるようになった。

しかし、この戒厳令下にあっても民間活動は厳しく制限され、キャンプと野外活動は1950年からようやく再会されたものの、様々な困難の過程を経てようやく今日の発展に至ったものである。このような、他の国にはみられないその独特な歩みについては、今日までほとんど明らかにされておらず、これらについて研究をすることは、他の諸国との比較のもとに台湾のレクリエーション活動の発展過程を考究する上で、大きな意味を有するものと考えられる。

本稿は、今日までの台湾のキャンプ活動を支えてきた諸団体の設置経緯とその活動などを中心に、関係文献や関係者の口述などに基づいて、研究を行なったものである。但し、関係諸団体は資料の整理が十分でない。例えば、歴史の最も長い「中国ボーイスカウト總會」についても事務局の移転や30年前の大型台風の被害により資料のほとんどが紛失したり浸水によって廃棄されてしまっていた。そのため、文献で明らかにすることのできない空白部分は関係者に対するヒアリング調査に頼らざるを得なかった。さらに筆者自身のキャンプ活動への参与と実務経験に基づく客観的知見も加味されている。

台湾におけるキャンプやボーイスカウト教育に関する既往の研究についてみると、1971年から1994年までに発表された論文80編の大半がボーイスカウト教育(52編)やボーイスカウト活動(24編)についてのもので、野外活動に関するものはわずか2編^{1,2)}にすぎない。

一方、一般人が自由気ままに楽しむ、いわゆるレクリエーション・キャンプに関する研究は皆無に等しく、台湾でこれからこの分野の研究を進展させる意味からも、その基礎として戦後のキャンプ活動の歩みを明らかにすることは重要であると考えられる。

2. 研究方法

本研究を進めるために、次の2つの方法をとった。

1) 台湾におけるキャンプ活動の発展過程を年表を作成することにより体系的に明らかにする。

2) キャンプの変遷の過程を文献・ヒアリングなどに基づいて探究する。

まず、台湾のキャンプ活動を支えてきた諸団体の設置経緯とその活動などを中心に、年表を作成した。但し、文献資料などで明らかにすることのできない部分は関係者に対するヒアリング調査によった。さらに筆者自身の40年近くにわたるキャンプ活動への関わりと実務経験による知見も加味した。

1950年の台湾におけるキャンプ活動の始まりから①キャンプに関する活動、②教育と政策、制度、③社団法人、④刊行物、⑤キャンプ用品産業、⑥キャンプ場、⑦政治に係わる重要要件について年代別に整理し、「キャンプ活動年表」(1949～94年)を作成した(表-1)。

このようにして作成した年表をもとに、キャンプに関する諸団体の動向を明らかにし、キャンプ活動の変遷について、総合的なとりまとめを行った。

3. キャンプ活動の変遷

1950年から1995年に至る台湾のキャンプ活動の変遷は、表-2に示したように3つの大区分と5つの時期からなる小区分に分けることができる。

以下、次に示す5つの小区分に従って述べていくものとする。

1. 教育キャンプの草創期 (1950～60年)
2. 教育キャンプの発展期 (1961～70年)
3. グループ・キャンプの萌芽期 (1971～80年)
4. 児童キャンプの発展期 (1981～87年)
5. ファミリー・キャンプの普及・発展期 (1988年～)

3.1. 教育キャンプの草創期 (1950～60年)

表一 台湾におけるキャンプ活動年表

年.月.日	活動・事象
1949.	☆ 台北Y.W.C.A.設立 ³⁾
1950.	☆ 中国ボーイスカウト総会が国際事務局を除籍される ⁴⁾ ☆ 中国ボーイスカウト総会が台湾に移転 ⁵⁾ ○ 台北Y.M.C.A.第1回児童キャンプ(亀山) ⁶⁾
1951. 8. 12. 12.	○ 台北Y.M.C.A.第1回青少年キャンプ(屈尺) ⁶⁾ ● 教育部が『ボーイスカウト組織の修正弁法』を公布 ⁷⁾ ● 教育部が『中学校ボーイスカウト教育の実施綱要』を公布 ⁷⁾
1952. 8. 10.14 10.31 11.	○ 台北Y.M.C.A.第2回青少年キャンプ(亀山) ⁶⁾ ☆ 中華民国四健会(4H Club)設立(嘉義高級農工学校) ⁸⁾ ☆ 中華青年反共救国団設立(台北) ⁹⁾ ☆ 中華童子軍(ボーイスカウト)教育学会復会 ¹⁰⁾
1953. 1. 6. 8. 8. 8. 8.	★ 『童軍(ボーイスカウト)世界』月刊を発行(陳海光等) ¹¹⁾ ★ 『台湾童子軍(ボーイスカウト)』月刊を発行 ⁵⁾ ○ 台北Y.M.C.A.第3回青少年キャンプ(屈尺) ⁶⁾ ☆ 中国ボーイスカウトが国際事務局に復帰 ⁵⁾ ○ 中国ボーイスカウト台湾省理事会サマーキャンプ(阿里山) ¹²⁾ ○ 中国青年反共救国団第1期暑期(夏期)戦闘營(8隊) ⁹⁾
1954. 2. 11.	○ 中国青年反共救国団第1期冬期戦闘營 ⁹⁾ ○ 中国ボーイスカウト台湾省理事会冬期キャンプ(関子嶺) ¹³⁾ ● 教育部が「中国ボーイスカウト教育改革方案」を公布し、中等学校ボーイスカウト課程の三級基準を制定 ⁷⁾
1955. 1 9. 1 9. 10.	● 教育部が「中学校ボーイスカウト教育実施綱要」公布 ⁷⁾ ★ 『童軍(ボーイスカウト)生活』月刊を発行 ¹⁴⁾ ● 台湾省立師範大学にボーイスカウト専修科を設置 ¹⁴⁾ ▲ 台北Y.M.C.A.「福隆キャンプ場」を建設 ⁶⁾
1956. 1 6. 10.	★ 『少年生活』月刊を発行 ¹⁶⁾ ● 教育部が「中学校ボーイスカウト教育の実施計画」を公布 ⁷⁾ ○ 中国ボーイスカウト第3回全国キャンプ大会(高雄澄清湖) ⁵⁾
1957. 9.	● 台北Y.M.C.A.第1期キャンプ指導員訓練を開始 ⁵⁾ ★ 『健普利(Jamboree)報』を発行 ⁷⁾
1958. 6. 1	▲ 台北Y.W.C.A.「頭城キャンプ場」を建設 ³⁾ ☆ 中華民国ガールスカウト発足 ¹⁸⁾
1959.	● 中国ボーイスカウト第1期ギルウェル訓練營開催 ⁵⁾
1960.	▲ 金山青少年センター・キャンプ場完成 ⁹⁾
1961. 2. 8.	○ 中国ボーイスカウト倍増運動 ⁵⁾ ☆ 中華民国四健協会発足 ⁸⁾ ▲ 中国ボーイスカウト「陽明山森林公園キャンプ場」が開設 ¹⁹⁾
1962. 7. 1	☆ 台湾省ガールスカウト理事会設立 ²⁰⁾
1963. 12. 5	★ 月刊誌『中国童子軍(ボーイスカウト)』を発行 ²¹⁾
1964. 6 11.	★ 『女童軍(ガールスカウト)隔月刊』を発行 ²²⁾ ★ 『快樂の歌唱』歌本を出版 ²³⁾
1965. 3	★ 『童軍(ボーイスカウト)生活シリーズ』を発行 ²⁴⁾

年.月.日	活 動 ・ 事 象
1966.	▲ 高雄澄清湖キャンプ場を建設 ⁹⁾
1967. 7.	★ 『唱跳選集』 歌本を出版 ²⁵⁾
1968. 1	● 中学校ボーイスカウト教育の読本が国立編訳館の一社編集により、統一化 ⁷⁾
3.29	★ 台湾テレビ局の番組「群星會」で最初の“ボーイスカウト”に関する番組を放映
9. 1	□ 教育部が9ヶ年制国民教育制度を実施
1969. 2. 1	★ 『野外雑誌』 月刊を発行 ²⁶⁾
	★ 『労働者の娯楽活動』 を出版 ²⁷⁾
	★ 『森林の歌』 レコードを出版 ²⁸⁾
9.	● 国立師範大学ボーイスカウト教育科が公民訓育学科に昇格 ⁴⁵⁾
1970. 10.	○ 中国ボーイスカウト第4回全国キャンプ大会(新竹) ⁵⁾
1972. 10.	● 教育部が中学校ボーイスカウト教育の課程を改正 ⁷⁾
1973.	☆ 中華民国露營協会の前身「キャンピング・クラブ」が設立 ³⁰⁾
8.	★ 『露營』 月刊誌を発行 ³¹⁾
8.	★ 『康樂歌集』 歌本を出版 ³²⁾
10.	★ 『唱と踊り』 レコードを出版 ³³⁾
10.	★ 『団体康樂活動』 を出版 ³⁴⁾
1974. 7.	▲ 台湾最初の私営キャンプ場「露營公司キャンプ場」を開設 ⁴⁵⁾
10.	☆ 中華民国露營協会準備会 ³⁶⁾
10.	★ 『野外活動』 を出版 ³⁷⁾
10.	★ 台湾テレビ局が「日正當中」番組で“グループ・キャンプ”を放映
1975. 1.	★ 『ボーイスカウト技能章シリーズ』 を出版 ³⁸⁾
2.	★ 『ボーイスカウト教育教材と教法』 を出版 ³⁹⁾
10.18	☆ 中華民国露營協会の設立認可 ³⁶⁾
10.	▲ 中華民国ガールスカウト・キャンプ・センターが完成(台北新店)
1976. 1	★ 『露營生活』 月刊を発行 ⁴⁰⁾
5.	○ 中国ボーイスカウト総会「コミュニティ・ボーイスカウト」強化案発表 ⁴¹⁾
6.	★ 『康樂集錦』 を出版 ⁴²⁾
6.	★ 『団体遊びの理論と実際』 を出版 ⁴³⁾
7. 1	★ 『戸外』 生活雑誌を発行 ⁴⁴⁾
8. 2	☆ 中華民国露營協会が国際事務局加盟を認可される ³⁶⁾
10.	▲ 曾文青年センター・キャンプ場を建設 ⁹⁾
11.	▲ 陽明山ボーイスカウト「苗圃キャンプ場」を建設 ⁴⁵⁾
1977.	○ 中華民国露營協会がF.I.C.C.大会に正式参加 ³⁶⁾
	● 中学校の学芸競争が始まる
1978. 2. 18	★ 『民生報』 を発行
9.	★ 『戸外生活シリーズ』 を出版 ⁴⁶⁾
10.	★ 『康樂歌曲集』 歌本を出版 ⁴⁷⁾
10.	○ 中国ボーイスカウト第5回全国キャンプ大会(高雄・澄清湖) ⁵⁾
1979. 8.	★ 中華テレビ局が『キャンプの旅』を放映
11.	○ 中華民国露營協会第1回全国ファミリー・キャンプ大会(石門ダム) ³⁶⁾
1980. 6.	▲ 基隆ボーイスカウト・キャンプ場を開設 ⁴⁸⁾
7.	○ 中華民国露營協会第1回児童サマー・キャンプ(金山キャンプ場) ³⁶⁾
10.	○ 中華民国露營協会第2回全国ファミリー・キャンプ大会(陽明山) ³⁶⁾

年.月.日	活動・事象
1981. 2.	▲ 陽明山菁山キャンプ場を建設 ³⁶⁾
3.	▲ 彰北清水岩ボーイスカウト・キャンプ場を開設 ⁴⁸⁾
7.	○ 中華民国露營協会第2回児童サマー・キャンプ(金山キャンプ場) ³⁶⁾
9.28	○ 中華民国露營協会第3回全国ファミリー・キャンプ大会(菁山) ³⁶⁾
12.	★ 『ボーイスカウト教育』論文集を出版 ⁴⁹⁾
1982. 7.	○ 中華民国露營協会第4回全国ファミリー・キャンプ大会(菁山) ³⁶⁾
8.	★ 台湾テレビ局の番組「大学城」で団体ゲーム『帶動唱』を放映
10.	★ 張忠仁遺作『ボーイスカウト学術論著』を出版 ⁵⁰⁾
1983. 7.	○ 中華民国露營協会第5回全国ファミリー・キャンプ大会(菁山) ³⁶⁾
7.26	● 中学校ボーイスカウト課程基準を改正 ⁷⁾
12.	★ 『ボーイスカウト教育研究』論文集を出版 ⁵¹⁾
1984. 9.	○ 中華民国露營協会第6回全国ファミリー・キャンプ大会(高雄) ³⁶⁾
10.	★ 『野外生活の方法』訳本を出版 ⁵²⁾
1985. 6.	▲ 南投県九九峰キャンプ場建設が完成 ⁵³⁾
6.	★ 『ボーイスカウト教育』論著集を出版 ⁵⁴⁾
7.	▲ 基隆市ボーイスカウト・キャンプ場建設が完成 ⁴⁸⁾
9.	○ 中華民国露營協会第7回全国ファミリー・キャンプ大会(彰化清水岩) ⁴⁸⁾
10.	★ 『帶動唱』カセットテープを出版 ⁵⁵⁾
1986. 9.	○ 中華民国露營協会第8回全国ファミリー・キャンプ大会(菁山) ⁵⁶⁾
10.	○ 中国ボーイスカウト第9回全国キャンプ大会(台南珊瑚潭) ⁵⁾
1987. 7.15	□ 動員勦乱時期戒嚴令解除 ²⁹⁾
8.	★ 中国放送局の番組「体育100」で“ファミリー・キャンプ”を紹介
11.	○ 中華民国露營協会第9回全国ファミリー・キャンプ大会(高雄) ⁵⁶⁾
1988. 7.6	○ 中国ボーイスカウト教育学会主催の『中学校ボーイスカウト・サマー・キャンプ』が行なわれる
8.	○ F.I.C.C.大会において1991年台湾大会を決定 ⁵⁶⁾
9.	★ 中華テレビ局の番組「中日特寫」で『ファミリー・キャンプ』を放映
10.	○ 中華民国露營協会第10回全国ファミリー・キャンプ大会(陽明山) ⁵⁶⁾
10.	★ 中国テレビ局の番組「周二掃描線」で『ファミリー・キャンプ』を特集放映
11.	★ 『帶動唱』ビデオテープを出版 ⁵⁷⁾
12.	★ 『ボーイスカウト教育研究』論文集を出版 ⁵⁸⁾
12.	★ 中華民国露營協会『ファミリー・キャンプ・ハンドブック』を出版 ⁵⁹⁾
1989. 7.	▲ 苗栗福寿山キャンプ場が開設 ⁵⁷⁾
10.	○ 中華民国露營協会第11回全国ファミリー・キャンプ大会(雲林梅溪山莊) ⁵⁶⁾
1990. 7.	★ 中華民国露營協会『ファミリー・キャンプ・ハンドブック』を発行 ⁶⁰⁾
7.	● 教育部が中学校ボーイスカウト教育の教科書の発行自由化
7.	★ 台湾テレビ局が“全国ファミリー・キャンプ大会”を紹介
7.28	□ 行政院治安会報で「ボーイスカウト教育の巧能發揮」を強調
9.28	○ 中華民国露營協会第12回全国ファミリー・キャンプ大会(菁山) ⁵⁶⁾
1991. 4.	□ 行政院院長が主管會議で「ボーイスカウト教育強化」を指示
7.	▲ 龍門キャンプ場建設が完成 ⁶¹⁾
	★ 観光局『露營地施設手冊』出版 ⁶²⁾
5.1	□ “動員勦乱時期”終結 ²⁹⁾
9.	● 中国ボーイスカウト各級訓練基準が確定 ⁶³⁾
6.	☆ 中華民国オートキャンプ協会設立 ⁶⁴⁾

年.月.日	活動・事象
1991. 8. 8. 10.	★ 『ボーイスカウト露營活動の計画と実施』を出版 ⁶⁵⁾ ★ 台北市政放送局が『ファミリー・キャンプ』を放映 ★ 中国テレビ局が『ボーイスカウトの旅』を放映
1992. 3.11 6. 6. 7.1 7. 8. 10. 11. 12.	● 教育部が中学校ボーイスカウト教育の見直しを行う ● 中学校ボーイスカウト教育の課程基準を修正 ● 教育部が「中学校ボーイスカウト教育の教師と数学の改善計画」に着手 ● 国立師範大学が「中学校ボーイスカウト教育の発展と改善の3年計画」を立案 ○ 中華民国オート・キャンプ協会第1回オート・キャンプ大会（龍門キャンプ場） ⁶⁷⁾ ○ 中華民国露營協会第13回全国ファミリー・キャンプ大会（善山） ⁶⁷⁾ ○ 中国ボーイスカウト第7回全国キャンプ大会（台南） ⁵⁾ ★ 『教師の休暇生活』を出版 ⁶⁸⁾ ★ 『ファミリー・キャンプ月刊』（中華民国オート・キャンプ協会）を発行 ⁶⁹⁾
1993. 7. 8. 9. 10. 11. 11. 12. 12.	★ 『野外活動の計画と実施（一）』を発行 ⁷⁰⁾ ○ 中華民国露營協会第14回全国ファミリー・キャンプ大会（南投） ⁵⁶⁾ ▲ 緑島キャンプ場第1期工事が完成 ⁷¹⁾ ○ 中華民国ガールスカウト台湾省第5回キャンプ大会（高雄） ²⁰⁾ ▲ 墾丁公園キャンプ場建設が完成 ○ 中華民国オートキャンプ協会第2回オート・キャンプ大会（彰化） ⁷²⁾ ★ 『野外活動の計画と実施（二）』を出版 ⁷³⁾ ★ 野外活動関連の雑誌『行動大学』を発行 ⁷⁴⁾
1994. 7. 9. 9. 9. 9. 9. 9. 10.25 10.29 10.29 10.	▲ 墾丁猫鼻頭キャンプ場が完成 ○ 中華民国露營協会第15回全国ファミリー・キャンプ大会（龍門） ⁵⁶⁾ ★ 警察放送局の番組「大自然の旅」で“キャンプ”を紹介 ★ 月刊『レクリエーション天地』を発行 ★ 『ボーイスカウト・キャンプ場建設基準』を出版 ⁷⁵⁾ ★ 月刊『逍遙遊』を発行 ⁷⁶⁾ ★ 『台湾区キャンプ場マップ』を発行 ⁷⁷⁾ ☆ 中国ボーイスカウト全国会員代表大会 ★ 『オートキャンプ・ハンドブック』を出版 ⁷⁸⁾ ○ 中華民国オート・キャンプ協会第3回オート・キャンプ大会 ⁷⁹⁾ ★ 『ボーイスカウト野外のゲーム』を出版 ⁸⁰⁾

註) 略記号解説

○：キャンプに関する活動 ●：教育と政策 ☆：社団法人 ★：刊行物 ▲：キャンプ場 □：政策

表一 台湾におけるキャンプ活動の時代区分

区分年	1950	1960	1970	1980	1988	現在
大区分 (3区分)	キャンプ前期 〈訓練教育キャンプ期〉		キャンプ中期 〈グループ娯楽キャンプ期〉	キャンプ後期 〈レジャー・レクリエーション・キャンプ期〉		
小区分 (5区分)	教育キャンプ 草創期	教育キャンプ 発展期	グループ・キャンプ 萌芽期	児童キャンプ 発展期	ファミリー・キャンプ 普及発展期	

国民政府が台湾に移転をしてきた際に、“ボーイスカウト”⁸¹⁾と“中国童子軍教育学会”⁸²⁾の組織はそのままの形で台湾に復活した。この45年間に台湾に存在したキャンプ活動に関する社团は9つの団体に及んでいる。そのうちの7つの社团はこの時期に発足した。中でもY.M.C.A.⁸³⁾は台湾におけるキャンプのパイオニアといえる。当時の台湾経済は農業生産が主体で、農業の従業者は60%台を占めていた。生活環境と言えは自然に溢れていて、人々の憧れはむしろ都会生活にあり、自然を求めて行方活動としてのキャンプの概念はなかったに等しいともいえる。

1951年に、台湾農業委員会がアメリカ・コネチカット大学農村社会教育教授アンダーソン氏を招請して、台湾農業と農会の業務について指導を受けた際に、彼はアメリカの4H Clubを紹介した。

翌年、農業教育家蔣夢麟は中華民国四健会を設立した。組織は学校四健会、農村四健会と漁村四健会の3つに分かれ、いずれも農・山・漁村の青少年、少女を対象に教育普及、農業などの生産と運営を目的としたものであった。

農村青少年少女のためにキャンプによる訓練が企画された。農村の指導者と農業志望の青少年少女を選んで、特別の訓練を与えるキャンプであり、現在、台湾では約305の支部が運営されている。

Y.M.C.A.は1951年から5回にわたり、児童キャンプを主催したが、その参加人数は毎回数十名足らずというわずかなものであった。

中学校のボーイスカウト教育課程におけるキャンプ教育は、大陸時期の制度を踏襲したものであった。1951年に教育部は“教育”と“活動”の分離計画を公布し、その実際の執行は1954年からであった。当時、学校のボーイスカウト教育では週1時間の授業以外に年1回のキャンプ実習が行われていた。しかし、キャンプ用品やテント、炊事用具、フライシート、訓練道具などは決定的に不足していた。学校は予算をやりくりして、1学期に1つか2つの用具を購入し、何年かを経て、やっと1クラス分のキャンプができる量が揃えられるといった状況であった。

ボーイスカウトの教師達は毎年、冬休みや夏休みはキャンプ場に1ヶ月位はいなければならなかった。当時の教師達は不満も言わず、教育訓練に真剣に打ち込んでいた。従って、その時代の生徒達はボーイスカウ

ト教師をことのほか尊敬していたのである。またその時代はキャンプ場と言えるものは存在しなかったし、キャンプは通常学校の運動場や水源地、川辺の平坦な場所、ダム湖畔地などで行われた。

童軍活動（ボーイスカウト活動）についてみると、ボーイスカウト総会が1956年、高雄の澄清湖で第3回の全国ボーイスカウト露営大会を開いた他、台湾省理事会でも1953年から毎年阿里山、関子嶺などで夏期、冬期キャンプを行なった。ボーイスカウト総会は自らの発展をはかるため、1956年に日本の軽井沢でボーイスカウト日本連盟主催により開かれた第1回全日本ジャンボリー大会に参加した。また、同年日本ボーイスカウト中央実習所の訓練にも、劉元孝、朱其榮、方純青、劉明智の4名を派遣した。また、さらに1957年には呉兆棠、陳忠信、劉元孝の3名を英国のギルウェルで開催されたWood Badge訓練に派遣した。翌年、劉元孝はこの訓練にパスし、台湾初めてのWood Badgeの資格を獲得し、同じボーイスカウトWood Badge所有者である日本の古田誠一郎が台北に来て、授与式を行なった。次いで1959年5月には陽明山のキャンプ場で早くも第1期のWood Badge訓練が実施され、より多くの人々に対する訓練がなされた。

1952年にガールスカウト総会の準備会である“中華民国ガールスカウト組訓委員会”が設立されたが、準備期間に6年を要して、1958年6月1日、ようやく中華民国女童軍総会が正式に法人化された。

中華民国ガールスカウトは1966年、第19回ガールスカウト国際会議が東京で開催された際に、国際事務局から会員としての認可を得た。

“中国青年反共救国団”⁸⁴⁾は時代の産物であった。発起者が当時の総統の蒋介石で、首席主任はその息子の蔣経国ということであったから、当初から格別な存在で、政府関係の当局者達はこれに対する支持を否むことはできなかった。国防部から教育部、各地方の郷鎮（市町村）まで、特に国防部は全力をあげてこれを支持した。救国団の初期の活動は「戦闘キャンプ」が中心であった。これらの活動は、一般の社团法人では実施したくてもその機会を与えられなかったので、若者達からは歓迎されることとなった。

1958年から救国団はキャンプを始め、これを“林間大隊”と名付けた。救国団の活動の大半を軍が支援していたが、キャンプ活動だけは中国ボーイスカウト総

会に委託して、キャンプの専門知識を借りていた。参加者の殆んどは高校生と大学生だったので、キャンプ活動の内容は童子軍課程を使い、それに戦闘技術的な課程を加えたものであった。

以上、いくつかの団体を例に草創期のキャンプ活動の状況を示したが、それらはいずれも教育性や訓練性に富んでいる一方で、多分に初歩的な段階であった。

この時期、キャンプは一般からは専らボーイスカウトがやるものだと見なされていた。当時、テントはなかなか入手し難く、中学校のボーイスカウトの教師達はそれを宝物のように大事にし、他に貸したりはしなかった。テントの貸し付け業者などというものもなかった。キャンパスの1つでも借りることができたら有頂天であった。こういう簡素なテントを張って、屋外で休日を楽しむなどといった者の数はそう多くはなかったのである。

3.2. 教育キャンプの発展期（1961～70年）

草創期の学校キャンプでは器材が欠乏し、教師も不足していた。国立師範大学は1955年に“童子軍（ボーイスカウト）専修学科”を設けて、学生募集を始めた。学生たちは2年間の学校教育を受け、1年間の実習課程を経て、正式の教員となる資格を得ることができた。中学校のボーイスカウト教育に教師の人材を大量に供給できるようになったのは1959年からである。これらの正規課程を受けた新しい教員達は教育精神、教育理念を持つ若者であった。授業課程以外に、クラス毎のキャンプ（学校側でもキャンプ用器材を揃えるようになっていた）実習を行っていた。アウトドア教育の実習については教員自身の熱心さはともかく、校長の支持が不可欠で、幸い、1960年代の校長達はおしなべて、“Learning by Doing”という校外活動を重視していた。学生達も特にそれを望んでいたようであった。学校キャンプの内容は、ボーイスカウト教育の課程のうち、キャンプ生活における刃物や斧の使い方、火おこし、炊事、テント張り、クラフト、自然観察、追跡ゲーム、そしてキャンプ・ファイヤーなどの実習活動である。また、それと同時に、キャンプという団体生活を通じて、学生たちに次に示すような機会をあたえ、教育面での効果を一層深めるものであった。

以上のような意味からして、1960年代にかけての学校教育キャンプはかなりの発展を遂げるに至ったので

ある。

童軍運動（ボーイスカウト）は、上記のようなボランティアに基づく人員訓練に引き続いて、1962年に中国ボーイスカウト総会が“倍增運動”を起こし、ボーイスカウトの人数は急激に増え、訓練人員の需要も急増して、台湾各地でボーイスカウトの訓練人員育成が行なわれるようになった。1960年より、台湾省理事会の代りに、各地の県、市理事会が各種の活動、サマー・キャンプ、ウィンター・キャンプ、特修章科目の実験活動、友好キャンプなどを主催するようになった。

国際的な活動や会議、訓練にも積極的に参加するようになり、1966年には極東地域のリーダー会議（5th Far East Regional Scout Conference）を主催して、世界総会訓練委員会主席ジョン・シューマン（John Thurman）が台湾を訪問した。

この倍增運動と各県、市の理事会による推進によって、ボーイスカウト活動は急速な発展を見せた。中国ボーイスカウト総会は1970年に第4回全国ボーイスカウト・キャンプ大会を開いたが、日本、フィリピン、米国、ニュージーランド、オーストラリア、韓国など諸外国からの参加をあわせ参加者は1万3千余名に及んだ。

中国青年反共救国団は教育キャンプ草創期における戦闘的キャンプを引き継いで推進すると共に、参加者増と施設不足に対応するため台北県金山に青年キャンプ場を設けた。キャンプ活動自体についてもボーイスカウト総会から長年にわたって支援を受けたのち、救国団自身のシリーズによるキャンプ活動を開発し、自前で活動ができるようになった。また、ドイツのユース・ホステルの手法を導入して、大禹嶺山荘、慈恩山荘、天祥山荘、霧社山荘などに若者用の宿泊施設を設けた。

救国団活動の参加者は1961年の11,529人から1970年の323,781人まで、10年間で30倍という驚くべき成長を見せ、キャンプ・チームも154隊から2,768隊にまで成長した。世界的にみてもこのような高成長を遂げた団体はほかにないのではないと思われる。

その他の民間キャンプ関係団体であるY.M.C.A.、Y.W.C.A.や4H Clubなどは、それぞれの活動を推進したものの、中国青年反共救国団とは比べものにならない程度のもので、毎年、夏と冬に分けて、100～200名程度のキャンプを実施していた。

一般社会人や、個人のキャンプに至っては、前期と

同じように、学校のテントを借りることもできず、キャンプを行う場合には自分で素材を探して、簡易な宿泊用の幕を張ったり、火おこしや炊事などもその辺りにある材料を使っていた。しかし、その面白さは何とも言えぬ、忘れ難いものであった。

たとえテントを借りることができても、キャンプ場の施設などは殆んどなかったので、その場にある素材を使ったり、大きな石をテーブルにして、坐ったままで食事をしたりで、その当時のキャンプというのは「無いものをつくる」に等しいものであった。

3.3. グループ・キャンプの萌芽期（1971～80年）

グループ・キャンプとは、一般の社会人、例えば会社員とか、工場勤めの人たちが大勢のグループで行うキャンプのことをいう。職場キャンプと称した方が適当かも知れない。この時期（企業社会の前段階）はとにかく一般の社会人達が、野外へ大勢で出かけるようになったのである。

その要因としては次のようなことが考えられる。①前の2つの時期に行なわれたボーイスカウトや学校のボーイスカウト教育、そして救国団のキャンプ活動によって、一般の人々の中にキャンプに対する認識が定着していた。②当時の学生達が後に社会人となって、休日には自然に戻り、学生時代に体験したことをもう一度試みようとした。③会社、工場などの経営者は仕事の効率向上と福祉政策という見地から関心を寄せ始めた。台湾は経済的に伸び始め、人々の生活が安定し、所得も増加してくると、生活意識も変化してきて、1970年代の初期には会社勤めや工場で働く人々、そして公務員たちは週末、休日を利用して、同僚仲間と一緒にキャンプに行くようになった。ピクニック気分で真白なパンタロンにハイヒールをはいて来る女性をよく見かけたものである。

このようにブームになるにつれて、キャンプ器材の関係産業も発展し始め、テントの製造業者や、キャンプ・アレンジ（エージェント）業者、また川辺などの私営キャンプ場、キャンプ用品の貸しつけ業者なども生まれた。

グループ・キャンプ萌芽期の後半になると、キャンプ・アレンジ業者は車の手配から、テント張り、炊事材料の用意、余興に至るまでサービスを提供するようになり、初めてキャンプを体験する人でも難儀なく参加

できるようになった。また、次第に年長者の参加もみられるようになってきた。当時のキャンプ・アレンジャーにとっては新しいキャンプ場を探して客に違った魅力のある体験を与えることが重要な仕事であり、更に肝心なことはキャンプ指導者の確保であった。キャンプ業者はこの時期に“キャンプ指導員募集”をしばしば行ったが、ほとんどの応募者は大学生であった。休日のアルバイトとして金を稼げたからである。これら業者のなかでも、名高いパイオニアは“露營国際有限公司”であった。

“中華民國露營協会⁶⁵⁾”はこのような一般人の行うキャンプの普及に伴って、1975年に時代の需要（ニーズ）に応じて誕生したものである。“中華民國露營協会（以下、露營協会）”の草創期における事業は、“露營国際有限公司”と同じ、キャンプのサービス提供やアレンジ代行などであった。そのため、“露營国際有限公司”は後に専らキャンプ用品の製造販売に専念するようになった。

露營協会が発足して間もない頃に、日本オート・キャンプ協会や日本キャンプ協会と、友好的な交流をすることができた。発足翌年の1976年5月1～5日には日本オート・キャンプ協会が埼玉県浦和市の秋ヶ瀬公園で開催した第6回全国ファミリー・キャンプ大会に、露營協会理事の幹部5名が参加した。この参加によって、日本のファミリー・キャンプとオート・キャンプの実態をつぶさに見ることができ、台湾にこうした近代的なキャンプ活動の概念を導入する上で大きな影響を与えることとなった。

この大会への参加が露營協会として初めての国際キャンプの交流体験であり、それ以降毎年日本のファミリー・キャンプ大会には参加して数多くの経験やノウハウを吸収し、台湾のファミリー・キャンプとオート・キャンプの発展に大きな影響を与えることとなった。

同じ1976年の11月、日本キャンプ協会は副会長齋藤伸次の引率で、理事、監事、スタッフなど15名が台湾を訪問した。露營協会は陽明山キャンプ場で“第1回中・日親睦交流キャンプ”を行なった。日本キャンプ協会は青少年キャンプを対象とする団体で、キャンプ指導員の訓練を行っており、露營協会との性格が似通っていたことから、その後も互いに連絡と情報交換を続けている。

露營協会はこのように日本と長年にわたっての交流

を行い、世界ラリーへも参加をし、かなりの経験を積み、また国内でのキャンプ普及も進んだので、1979年11月10日～12日、桃園県石門ダムで第1回の全国ファミリーキャンプ大会を開いた。さらに、1991年にF.I.C.C.世界ラリーを主催したことを含め、毎年欠かさず大会を開いてきた。

一方、この時期1968年に台湾に9年制国民教育が実施されることとなり、中学校の進学試験が取り止めになって、小学生の塾通いがなくなった。これはキャンプ活動の発展にとって大変喜ばしいことであった。しかし時代が進むにつれて、進学競争の圧力は中学校へと迫ってきた。学校教師も父兄もボーイスカウト教育など進学の試験科目にないものを重視するはずがなく、ボーイスカウト教師も功利主義の影響を受けて、昔のような熱心さで学生に対してキャンプ指導をしなくなった。国立師範大学公民訓育系講師の呉務貞が1982年に発表した研究レポート⁸⁰⁾にこの間の事情が示されている。同研究レポートでは次の7点に整理されている。

- ①進学主義により価値観が偏るようになった。
- ②進学主義により教学のあるべき姿が失われた。
- ③ボーイスカウト教育の教師には専業化教師が不足している。
- ④教材と場所（フィールド）が不足している。
- ⑤課程基準で定めた活動の全部ないし一部でさえ実施し難い。
- ⑥ボーイスカウト隊は隊務の推進を確実に行っていない。
- ⑦課程教材の制定内容は実際の需要に合致していない。

以上の状況や学校クラス毎のキャンプ数の減少から、同時期の中学校キャンプは下降線を辿っていった。

ボーイスカウト活動は、そもそも学校のボーイスカウト教育に依存していたので、この時期には進学主義の影響が及んだ。1978年10月3日～12日、中国ボーイスカウト総会が高雄県澄清湖で第5回全国ボーイスカウト・キャンプ大会を開催した以外は、中国ボーイスカウト総会はむしろ国際活動への参加を重視した。

それにボーイスカウトの活動は、そもそも学校体制に依存していたので、中国ボーイスカウト総会は校長達の機嫌を取るため、崇高なWood Badge訓練章を校長への贈り物にするようなことをしていた。その時

期のWood Badge訓練章は、ほとんどが校長達に授与されていて、ボーイスカウトに熱心な者や隊長たちの存在は無視され、ボーイスカウト隊の隊長たちの不満がつって、ボーイスカウトの発展を阻害する原因の1つになってしまった。

中国青年反共救国団は、それまでの高度成長の下での特殊な存在でもあったことから、1971年7月1日に“夏期青年育楽活動”を“青年自強活動”に名前を改め、1974年にはその参加者数は延百万人を突破するに至った。この特殊な体制の下で未登録の特殊旅行会社ができ、“中国青年服務社”と称して、各政府機関や関係団体のキャンプ活動や旅行、観光のエージェントを行なうようになった。

のちになって、中学校の学校キャンプにも進出し、“南十字營・北十字營”と名付け、公的なルートを通じて各学校に通報し、北の学校は南へ、南の学校は北へといった具合にキャンプへの参加を強制した。

中華民国四健会（4H Club）はこの時期にキャンプ活動を推進し、各県、市でキャンプ大会を開催すると共に、1977年の7月には台北県の金山青年活動センターで全台湾省の四健会大会を開き、全台湾各地の会員が一堂に集まって、互いの交流とキャンプ技能の研修を行なった。

この時期には、概して一般社会人によるキャンプやグループ・キャンプは経済の発展に伴って芽生え始めていた。しかし、一方の教育的なキャンプは進学主義と功利主義の双方の圧迫を受けて伸び悩んでいたといえるだろう。

3.4. 児童キャンプの発展期（1981～87年）

露營協会は、キャンプ活動を子どもの頃から根付かせることをねらって、1980年7月15日に第1回のサマー児童キャンプを開いた。その初期は2泊3日のキャンプだったが、中期以降は3泊4日に伸ばした。4日間の活動内容は団体ゲーム、野外動植物の観察、自然採集、郷土おもちゃ作り、水上活動、追跡、キャンプ・ファイヤーなどであった。

露營協会が主催したサマー・キャンプのスタッフはすべてキャンプ指導員としての厳しい訓練を受けた人達で、参加した子ども達に良い思い出を残した。第2回の児童キャンプには友人やクラス・メートを呼び集めて再び参加した子どもが少なくなかった。社会大衆

からの信頼を受けて、毎年参加者数は穏やかな成長ぶりを見せていた。1980年代になって、他の民間団体、会社や財団法人、文化教育基金会などは相次いで児童サマー・キャンプを開催するようになり、夏休みに入るといつも新聞・雑誌に盛大な広告を出した。1980年代の台湾経済の奇蹟的發展によって、どの家庭も子どもにこの活動に参加させる程度の余裕が出て来たし、共働きの家庭が増えたので、夏休みの間に子どもに自然とふれ合う機会を与えようという気持ちが強くなってきていた。

夏休み中のサマー・キャンプは、1988年の夏にピークに達した。財団法人金車文教基金会が行なった調査によると、当時100近くの大小の団体が児童サマー・キャンプを行い、児童キャンプの全盛期とみられたが、その主催団体や内容に片寄りがある、親達は選択に困っていた。翌年からはそれが急速に減少し、30ほどの主催団体しかみられなくなった。1990年の参加者数も激減した。その理由は次の4点にあると考えられる。

- ①ファミリー・キャンプが普及するようになり、夏休みを利用した子ども連れのキャンプが多くなった。
- ②学校キャンプが再び盛んになり、政府のアウトドア教育重視の政策もあり、各県、市教育局の規定により、中学校、小学校は夏休みのキャンプを実施した。
- ③国外観光の自由化により、子ども連れで外国へ旅行する家庭が多くなった。
- ④社会の多様化によって、子どもの遊びの選択肢が増加した。

1970年代には学校キャンプとボーイスカウト活動が伸び悩んでいたため、教育部では1977年に9ヶ年国民教育の10年間の成果を評価するに際して、全台湾の各県、市対抗の学芸コンテストを行なった。その中にキャンプ活動を中心とした1泊2日のコンテストがあり、これは各学校から男女それぞれ4名ずつを派遣して1組になり、テント張り、炊事、音楽、美術、民俗活動などを競うものであった。これには国民中学が掲げた徳育、智育、体育、群育、美育の五育並立の教学を総合的に見定める狙いがあった。1980年代に入ると、各学校は良い成績を獲得するために、学期のはじめ頃から人選し、特訓をしていた。日常と変わらない心構えで対応していた学校もあったが、いずれにせよ、競争の重点がボーイスカウト教育のキャンプ活動におかれ

たので、ボーイスカウト教育が再び重視されるようになったのである。

1977年に当時の台湾省政府社会庁長の許水徳がコミュニティ・ボーイスカウト活動を強力に支持し、各コミュニティに少なくとも2つのボーイスカウト隊を設立するように指示すると共に、キャンプ器材の購入の経費は省政府が負担した。これに対応して郷、鎮役所がコミュニティ・ボーイスカウトを結成したが、ほとんどのコミュニティ・ボーイスカウトの隊長は、中学校のボーイスカウト隊（ボーイスカウト教師）が兼任をしていた。ボーイスカウト・キャンプと言っても学校から臨時的に人員などを借りて行っていた。ところが、許水徳庁長が昇進して庁長を辞めると、コミュニティ・ボーイスカウトも自然消滅してしまった。

同じような事が1980年代にも起きた。1984年当時の教育部長李煥は中国ボーイスカウト総会の理事長を兼任していた。ボーイスカウト教育を強化するため、教育部がボーイスカウト活動の予算を増やし、その影響でボーイスカウト隊の数は1984年から逐年増加し、1988年10月には台南県珊瑚潭で第6回のボーイスカウト全国キャンプ大会を開催した。ところが、1988年李煥部長の転任に伴って、ボーイスカウトの隊数は急速に減ってしまった。

中国青年反共救国団はこの期間中に児童サマー・キャンプを拡大していった。第1期には1980年7月5日“少年サマー・キャンプ”を実施して、以降11回のサマー・キャンプが陽明山のボーイスカウト・キャンプ場で行われた。同じ年に、台北市政府は救国団に“幼獅育樂キャンプ”の開催を委託し、その後各地方の県、市の救国団も先を争って児童のサマーキャンプを開催するようになった。

1981年から90年までの参加者数はウインター・キャンプの45万人、サマー・キャンプの60万人をずっと維持していた。特筆すべきことは、1988年から海外青年活動を開催し始めたことである。台湾は1987年に戒嚴令が解除されたが、18才以上で、まだ兵役を終ってない男子青年は外国に行くことができなかった。しかし救国団主催の海外活動ならば、特例として認められていたのである。

1980年代を振りかえってみると、“児童キャンプの時代”であったといえるだろう。最大の団体から最小の団体に至るまで各地でウインター・キャンプとサマー・

キャンプを開催していた。児童キャンプ・ブーム一色であった。その要因は何と言っても経済成長にあったとしてよいだろう。

3.5. ファミリー・キャンプの普及発展期

(1988年～)

ファミリー・キャンプという、乗用車と結び合わされたキャンプ活動は、1976年に日本オート・キャンプ協会の活動に刺激されて台湾に導入されたものである。

第6回全国ファミリー・キャンプ大会が終わり、日本オート・キャンプ協会から関係資料を入手し、帰国後すぐに日曜大工の方法で台湾で初めての“手造りキャンピングカー”が製作された。

しかしその頃は台湾の経済は成長の初期段階で、1980年代に入ってようやく急速な成長・経済奇蹟がもたらされたのであり、当時のファミリー・キャンプは台湾ではまだ啓蒙期の状態であった。1982年に“台北市オート・キャンピング・クラブ”が発足したが、1990年でも会員は18家族から46家族にしか増えず、キャンピングカーに改造されたものは僅か7台であった。

この時期の都市住民の間では、人口の過密化に伴って、アウトドア志向の休暇意識が次第に高まりつつあった。自動車にキャンプ器材や家族を載せて、キャンプ場や河原でキャンプする人も見られたが、まだ初歩的なキャンプ様式で、芝生地で勝手に火をおこしたり、大地に座ったままで食事をするなどしていた。これがファミリー・キャンプの始まりであった。当時、ファミリー・キャンプを普及していくためには、ファミリー・キャンプの品質レベルを引き上げなければならないと考えられた。それには何よりも欧米、日本など先進国の様式スタイル実例を導入することが必要であったと当時考えられた。台湾のキャンプ活動を国際先進国レベルに引き上げていくためには、世界的なレベルのキャンプ大会を台湾で行うことが最も効果的と思われた。そのため、F.I.C.C.に1991年の国際キャンプ大会を台湾で開くように求めたのである。

1991年、F.I.C.C.ラリー大会主催権の獲得というチャンスをとらえて、各雑誌・新聞・マスコミにファミリー・キャンプに関する情報を発表した。また、同年、露營協会から『ファミリー・キャンプ・ハンドブック』^{59,60)}を出版した。ファミリー・キャンプを推進するため、露營協会では台湾の北部、中部、南部で逐年ファミリ

ー・キャンプ(家庭露營)大会を開催していった。1990年代に入りかなりの進展が見られるようになった。さらに、1991年6月の“中華民国オート・キャンプ協会”⁶⁰⁾の発足と同年F.I.C.C.国際キャンプ大会の台湾における開催がこれに拍車をかけ、キャンピングカーやキャラバン車の輸入も一役を担い、台湾におけるファミリー・キャンプは一層の前進を遂げるようになったのである。

この時期、一般社会人によるグループ・キャンプも、同様に活発化し、年齢層も大幅に広がった。ただ一つだけの問題は、観光局の統計“国民旅遊統計数字”によると、休暇活動人口の大幅成長の中で、日帰りによるデイ・キャンプの成長率ももっとも高いことである。デイ・キャンプをする人々は休日などになると、キャンプ場へ殺到する。行なうことはバーベキュー程度でレジャー活動のバリエーションは少ない。キャンプ場へ着くと、バーベキュー用の器材を借り、バーベキューのコーナーへ行って食事をし、その後は決まって「カラオケ」「くじびきゲーム」に終始するという次第である。

このような活動は選挙の期間になると一層盛んになり、同窓会、同郷会、近隣の親睦会、敬老活動など、与党も野党も、先を争って開催をするのである。余暇活動が普及するようになったとはいえ、余暇時間をゆとりをもって過ごすことや休暇の内容を向上させていくことにはまだ程遠いのが実状なのである。

ボーイスカウト教育とボーイスカウトの活動にとって、この時期は大きな転換期であった。1991年当時の台湾では覚醒剤などの青少年問題が深刻になっていた。行政院長は前後2回にわたって、行政院会でボーイスカウト教育強化の重要性を強調した。学校ボーイスカウト教育を通じ、学生のゆがんだ生活と道徳観を矯正することが目的とされた。教育部に“国民中学ボーイスカウト教育発展3ヶ年計画”を制定させた。この3ヶ年計画は1994年から執行されて、ボーイスカウトの教師養成とボーイスカウト教育の教材やキャンプ実習教材の補充、学校キャンプ場の建設、学校キャンプの確実な執行など、台湾のボーイスカウト教育は再び燃え上がるようになった。

ボーイスカウト活動については、1990年に人民団体法が公布された後、中国ボーイスカウト総会は教育体制に依存することができなくなり、人件費などの確保

に窮するようになったが、“国民中学校ボーイスカウト教育3ヶ年計画”によってかなりの活動経費が出るようになり、1993年に第7回の全国ボーイスカウト・キャンプ大会を台南で開催することができた。続いて1994年には全台湾13区域に分けてボーイスカウト・キャンプも開かれ、ボーイスカウトの教育キャンプにとっても、またキャンプ全体の発展にとっても喜ばしいことであった。

中国青年反共救国団も、人民団体の法公布によって特権時代が終わった。民間の社団法人が雨後の竹の子のように現れるようになった、戦闘キャンプ、サマー・キャンプ、サマー活動やツアーなどを主体としていた救国団は、多くの社団との競争に直面している。だが、40余年もの経験を累積してきたマンモス救国団の実力を軽視することはできない。野党は旅行業の同業連合組合と組んで公聴会を開き、誰しも救国団の今日までの貢献は認めはするものの、これからは他の旅行者と同じように登録をし、公平、平等、合理的に競争をするべきだと指摘した。

4. 台湾におけるキャンプ活動のまとめ

以上、台湾におけるキャンプ活動の変遷を5つの時期に分けて述べてきたが、これを3つにグルーピングし、その要点をまとめると次のようになる。

(1) 現代キャンプの前期 (1950～70年)

この期間は台湾に移転した国民党政府がそれまで大陸で実施していた「ボーイスカウト教育」を台湾の中学校において継続させた「教育キャンプ草創期」と、1960年代から国立師範大学のボーイスカウト教育専門学科の出身者がボーイスカウトの教育に投入され、政策面からもボーイスカウト教育が支持された「教育キャンプ発展期」の2時期を1つにまとめたもので、〈訓練・教育キャンプ期〉とも名付けられる。この時期の発展過程は次のように要約される。

- ①中学校におけるボーイスカウト教育制度は大陸時期の制度を踏襲したものであったが、中学校の教育課程にキャンプ活動のカリキュラムと技能が取り入れられたことによって、その後のキャンプ活動の発展のための基礎が築かれた。
- ②大陸時期のボーイスカウト教育とボーイスカウト活動が混同されたことにより、国際ボーイスカウ

ト総会から除名されたが、“教育”と“活動”の分離を行うことによって、その会籍が回復された。

- ③国民党政府は“反共復国・結合愛国青年・完成中興大業”というスローガンのもと“中国青年反共救国団”を設立した。初期は高校生、大学生の参加を促すため無料で開催された。裕福ではなかった当時において、学生がキャンプ活動を体験したことは、その後の野外活動の発展に大きく寄与することとなった。
- ④国立師範大学は1955年にボーイスカウト教育専修科を設けて、中学校におけるボーイスカウト教育の教師を大量に養成した。これが、台湾におけるキャンプ活動の前期における教育キャンプの発展に重要な影響を与えた。

(2) 現代キャンプの中期 (1971～87年)

1970年代に入って、台湾の工業社会が形成され、都市生活のストレス解消を求めため、会社単位での職場グループ・キャンプが増えていった。また、両親とも仕事が忙しく子どもの世話があまり出来なかったことから、児童を対象とするグループ・レクリエーションキャンプの発展した時期でもあり〈グループ・エンターテインメントキャンプ期〉と名付けたい。この時期の発展過程は次のように要約される。

- ①産業社会の形成により、多くの労働者がそれぞれ仕事を分担し、動力機械を使って生産活動を行うようになった。毎日が単調な仕事の繰り返しで、精神と肉体の開放が求められ、アウトドア生活へのあこがれが高まった。
- ②会社や工場の経営者は仕事の効率と福祉政策の整備をはかるため、社員と従業員対象の慰安旅行または慰安キャンプを行うようになった。
- ③キャンプ・エージェンツの積極的な参加はグループ・キャンプの普及啓蒙に寄与したものとみられる。
- ④中国青年反共救国団は各政府機関や関係団体のキャンプ活動を引き受け“自強活動”と名付けてキャンプ・エージェンツと同じような活動をしてきた。
- ⑤1980年代の台湾経済発展に伴って共働き世帯が増え、所得は増加したものの、子どもの世話は疎か

になった。夏休みには信用のおける社団の主催する児童キャンプに子どもを参加させ、自然とふれあう機会を与えようとする世帯が増加した。

(3) 現代キャンプの後期(1988年～)

1986年の「労働基準法」の実施により、休暇制度が定着するようになり、さらに1987年の戒厳令解除で様々な社団法人が設立され、出版物も自由に出回るようになった。1988年の一人当りの国民所得が6,333アメリカ・ドルになったことも拍車をかけ、ファミリーキャンプが普及した。1991年のF.I.C.C.ラリー主催なども伴って、台湾のキャンプ活動はレジャー・レクリエーションキャンプの時代(レジャー・レクリエーションキャンプ期)へと大きく推進・移行しつつあるといえるだろう。この時期の発展過程は次のように要約される。

- ①国民所得が“所得の高い国”の水準に達したため、レジャー・レクリエーションのための支出が可能になった。
- ②労働基準法の制定により、休日制度が定着し、国民の多くが個人の自由で過ごすことができる休日を得ることができるようになった。
- ③都市への人口の集中に伴って、スモッグ、騒音、排気ガスなど絶え間ない緊張の連続からストレスが発生し、“人間回復”ということが叫ばれるようになった。
- ④産業社会の緊張した人間関係が一般化するに伴って、“親子の断絶”も起こるようになった。ファミリー・キャンプに対して親子のきづなの強化が期待されるようになった。
- ⑤乗用車の急増によりキャンプ場への移動運搬手段が確保された。

5. 今後の課題

以上、年表を作成して提示すると共に、台湾におけるキャンプ団体の設立と運動の経過、そして戦後45年来のキャンプ活動とその教育的、娯乐的そしてレクリエーション的な意義、並びに各時期におけるその盛衰などについて述べてきた。

キャンプ団体について、最も代表的な団体をいくつか紹介したが、1980年代までにも、キャンプ活動と関係を有する登山団体が数多くあった(中華民国登山協会、中華山岳協会、中華健行登山協会、台湾山岳協会

など)。しかし、いずれも登山が主な目的であったので省略をした。戒厳令が解除された後には十余の登山・キャンプ関係の社団法人ができたが、本稿においては割愛した。

今後の課題として、「経済成長」や「キャンプ産業」、「情報・出版物」、そして「キャンプ場」の発展が台湾におけるキャンプの変遷に及ぼした影響について検討する必要がある。

謝辞

本稿の執筆にあたっては、東京農業大学造園学科風景計画学研究室の鈴木忠義教授をはじめ、スペース・コンサルタンツの前野淳一郎先生および国立台湾師範大学公民訓育学科の劉彦俊教授、謝美蓮助教授、呉務貞助教授、呂建政助教授、淡江大学日語学科林淑茵講師の懇切な御協力と御指導を賜った。ここに深甚の謝意を表したい。

文献および補註

- 1) 許玲玲(1980): 国民中学校学生レクリエーション活動の調査と分析. 訓育研究, 18(4).
- 2) 呉務貞(1993): 童軍野外活動施行の原則と方法. 台湾教育, 51(5).
- 3) Y.W.C.A.(1994): 簡介Y.W.C.A., 台北Y.W.C.A., 8pp.
- 4) 劉俊民(1981): 中国ボーイスカウト教育. 中国ボーイスカウト教育学会, 158pp.
- 5) 呉水雲(1992): 中国ボーイスカウト月刊, 29(8). 中国ボーイスカウト総会, 52pp.
- 6) 竇仁君(1991): Y.M.C.A.キャンプ. 台北中華Y.M.C.A., 55pp.
- 7) 陳鐵(1985): ボーイスカウト教育論著. 中国ボーイスカウト教育学会, 344pp.
- 8) 中華民国四健会(1992): 四健教育. 中華民国四健会, 96pp.
- 9) 李鍾桂(1992): 飛躍青春四十年. 中国青年反共救国団, 216pp.
- 10) 蕭忠国(1986): 中国童子軍教育学会会員手冊. 中国ボーイスカウト教育学会, 102pp.
- 11) 陳海光ほか(1953): 童軍世界. ボーイスカウト世界月刊社, 8pp.
- 12) 陳忠信(1953): 台湾ボーイスカウト(月刊). 中国

- ボーイスカウト台湾省理事会. 48pp.
- 13) 陳忠信(1953): 台湾ボーイスカウト, 1(4). 中国ボーイスカウト台湾省理事会. 60pp.
- 14) 劉彦俊(1955): ボーイスカウト生活(月刊). ボーイスカウト生活月刊社. 32pp.
- 15) 公民訓育系(1983): 国立師範大学公民訓育学系概要. 公民訓育系. 138pp.
- 16) 朱其榮(1956): 少年生活(月刊). 少年生活雜誌社. 16pp.
- 17) 藍寧(1957): 健普利(Jamboree)報. 健普利月刊社. 8pp.
- 18) 陶淑貞(1984): 中華民國ガールスカウト服務員手引. 235pp.
- 19) 陳忠信(1961): 台湾童子軍, 8(4). 中国ボーイスカウト台湾省理事会. 60pp.
- 20) 洪賽綿(1993): 台湾省ガールスカウト三十周年特刊. 台湾省ガールスカウト会. 64pp.
- 21) 謝又華(1963): 中国ボーイスカウト, 1(1). 中国ボーイスカウト總會. 40pp.
- 22) 陶淑貞(1964): ガールスカウト(隔月刊). 中華民國ガールスカウト總會. 8pp.
- 23) 劉元孝(1964): 快樂の歌唱. 日盛印刷廠. 110pp.
- 24) 劉彦俊(1965): キャンプ等. 六藝出版社. 全17冊.
- 25) 陳盛雄ほか(1967): 唱跳選集. 水牛出版社. 134pp.
- 26) 韓猗(1969): 野外(月刊). 野外雜誌社. 168pp.
- 27) 江良規訳(1969): 労働者の娯樂活動. 文部省. 316pp.
- 28) 陳盛雄ほか(1969): 森林の歌レコードと歌本. 森林出版社. 33 1/3 LP 1 枚.
- 29) 張茂森(1993): 台湾二千万人の選択. 面影橋出版. 213pp.
- 30) 陳盛雄(1990): 家庭キャンプハンドブック. 中華民國キャンプ協会. 88pp.
- 31) 簡永光(1973): キャンプ(月刊). キャンプ月刊社. 8pp.
- 32) 張慶三(1973): 康樂歌集. 時代出版社. 156pp.
- 33) 張慶三(1973): 唱と踊り. 華聲レコード公司. 33 1/3 LP 3 枚組.
- 34) 中国青年反共救国団(1973): 団康手帳. 中国青年反共救国団. 180pp.
- 35) 簡永光(1974): キャンプ月刊, 4. キャンプ月刊社. 8pp.
- 36) 特刊委員会(1985): キャンプ会訊十周年特刊. 中華民國キャンプ協会. 150pp.
- 37) 劉彦俊(1974): 野外活動. 正中書局. 1,505pp.
- 38) 胡開昌他(1975): ボーイスカウト技能章シリーズ. 徐氏基金会. 全70巻.
- 39) 劉彦俊(1975): ボーイスカウト教育教材と教法. 正中書局. 1,066pp.
- 40) 陳伯安(1976): キャンプ生活(月刊). 中華民國キャンプ協会. 100pp.
- 41) 崔德禮(1974): 中国ボーイスカウト(月刊), 13(4). 中国ボーイスカウト總會. 34pp.
- 42) 王麗美(1976): 康樂集錦. 王家出版社. 186pp.
- 43) 李適中(1976): 団体遊びの理論と実施. 幼獅出版社. 156pp.
- 44) 陳遠見(1976): 戸外生活(月刊). 戸外雜誌月刊社. 126pp.
- 45) 崔德禮(1976): 中国ボーイスカウト(月刊), 13(5). 中国ボーイスカウト總會. 34pp.
- 46) 陳遠見ほか(1978): 戸外生活シリーズ. 戸外生活雜誌社. 全15巻.
- 47) 林婉君(1978): 康樂歌曲集. 大夏出版社. 156pp.
- 48) 高重輝他(1993): ボーイスカウトキャンプ場の旅. 教育部. 96pp.
- 49) 沈六他(1981): 中国ボーイスカウト教育. 中国ボーイスカウト教育学会. 158pp.
- 50) 張忠仁(1982): ボーイスカウト學術論著. 中華書局. 2,186pp.
- 51) 謝美蓮他(1983): ボーイスカウト教育, 45. 中国ボーイスカウト教育学会. 80pp.
- 52) 葉振聲(1984): 野外生活の方法. 大衆書局. 242pp.
- 53) 王啓賢(1985): 九九峰キャンプ場企画書. 南投県政府. 40pp.
- 54) 劉彦俊他(1985): ボーイスカウト教育論文集. 水牛出版社. 344pp.
- 55) 戴南祥(1988): 帶動唱. 解凍出版社. カセットテープ 5 本組.
- 56) 林晋章(1995): 中華民國キャンプ協会20周年特刊. 中華民國キャンプ協会. 136pp.
- 57) 戴南祥(1988): 帶動唱. 解凍出版社. ビデオテープ 3 本組.
- 58) 王清波他(1988): ボーイスカウト教育研究. 中国

- ボーイスカウト教育学会. 274pp.
- 59) 陳盛雄(1988): ファミリーキャンプハンドブック. 中華民國キャンプ協会. 64pp.
- 60) 陳盛雄(1990): ファミリーキャンプハンドブック. 中華民國キャンプ協会. 88pp.
- 61) 游明国(1991): 龍門キャンプ場建設報告書. 観光局. 104pp.
- 62) 陳盛雄(1991): キャンプ場施設マニュアル. 観光局. 288pp.
- 63) 吳水雲(1991): 中国ボーイスカウト月刊, 28(3). 中国ボーイスカウト総会. 48pp.
- 64) 陳盛雄他(1991): 中華民國オートキャンプ協会成立特刊. (中華)オートキャンプ協会. 80pp.
- 65) 黄克仁(1991): 中国ボーイスカウト月刊, 28(6). 中国ボーイスカウト総会. 46pp.
- 66) 陳盛雄ほか(1991): キャンプ活動の企画と実施. 中国ボーイスカウト教育学会. 374pp.
- 67) 編集委員会(1991): 第1回全国オート・キャンプ大会手帳. (中華)オートキャンプ協会. 20pp.
- 68) 陳盛雄ほか(1992): 教師の休暇生活. 台湾省教育庁. 420pp.
- 69) 陳盛雄(1992): 家庭オート・キャンプ月刊. (中華)オートキャンプ協会. 4pp.
- 70) 陳盛雄ほか(1992): 野外活動の計画と実施(一). 台湾省教育庁. 274pp.
- 71) 陳盛雄(1992): 緑島キャンプ場の運営管理. 観光局東部管理処. 36pp.
- 72) 陳盛雄(1994): '94オート・キャンプ・ハンドブック. (中華)オートキャンプ協会. 96pp.
- 73) 陳盛雄ほか(1992): 野外活動の計画と実施(二). 台湾省教育庁. 242pp.
- 74) 行動大学編集部(1993): 行動大学(月刊). 行動大学雑誌社. 166pp.
- 75) 陳盛雄ほか(1994): ボーイスカウト・キャンプ場建設基準. 中国ボーイスカウト総会. 50pp.
- 76) 緑生活新聞社編集部(1994): 消遙遊(月刊). 緑生活雑誌社. 176pp.
- 77) 陳盛雄(1994): 台湾区キャンプ場マップ. 中華民國キャンプ協会.
- 78) 陳盛雄ほか(1994): '95オート・キャンプ・ハンドブック. (中華)オートキャンプ協会. 104pp.
- 79) 陳盛雄ほか(1994): ボーイスカウト野外のゲーム. 台湾省教育庁. 246pp.
- 80) 吳務貞ほか(1983): 公民訓育学報, 1(創刊号). 公民訓育学系. 413pp.
- 81) 中国ボーイスカウト総会は1950年9月、南京より台北へ移転した後に、再発足した。そして、国民党政府教育部の中に事務所を設け、ボーイスカウトの各級課程を制定するなどボーイスカウト運動を積極的に進めた。大陸(南京)時代には中学生は全員ボーイスカウトに所属することになっていたため、世界ボーイスカウト総会からその主旨に反すると批判され、国際会籍から除籍された。しかし、1951年に教育部は“ボーイスカウト教育”と“ボーイスカウト運動”の分離を図り、同年12月に“中学校ボーイスカウト教育改進黨法”と“中国ボーイスカウト組織法”を公布して双方が分離され、国際会籍に復帰することになった。
- 82) ボーイスカウト教育に熱心な教育者たちによって、1942年春、中国童子軍(ボーイスカウト)教育学会準備会が発足し、1943年6月20日重慶で正式に学会が設立、吳兆棠が初代理事長に選ばれた。学会は1950年、国民政府と共に台湾に移転し、1952年7月16日に内政部によって社団法人として認可され、同時に会員大会を開催して蕭忠国が理事長に就任した。学会の事業は学術の研究、野外教育の理論と実践を目的とした講演会や研究会の開催などであった。また、“中学校ボーイスカウト課程基準”の検討会議、特にボーイスカウト教育の理論と実践、野外活動のなどに関して行った。
- 83) Y.M.C.A.(台北中華基督教青年会)は1945年10月10日に発足して以来、青少年の個性重視教育、野外教育、全人教育の実践を、キャンプというセッティングの中で行ってきた。1950年には第1回の児童サマー・キャンプを亀山で開催したが、これは台湾における現代キャンプのパイオニアとされている。
- 84) 中国青年反共救国団は1952年10月31日、蒋介石の誕生日に台北で結成された。初任主任は蔣経国で、設立の目的は“全国の優秀な青年を集め、その知識増進や、体格訓練、技能訓練、愛国精神の育成を行ない、もって戦時にそなえと共に、反共勝利の獲得と復国任務の達成に努めること”とされた。国家のために設立された組織なので、そ

の重点は文武を兼ね備えた教育にあった。大陸時期からボーイスカウト教育はすでに中学校の教育課程の一部として取り入れられきたが、このボーイスカウトという軍事訓練を兼ねた教育課程を高等学校にも組み入れることを意図したもので、その任務を担当するのが救国団であった。それ故に、初期の救国団は体制上、国防部に属していた。1969年になって、国防部から切り離され、内政部に登録する社団法人となったが、高等学校の軍事訓練課程については、1960年に教育部の主管となった。救国団は1953年以降夏、冬に分けて青年戦闘キャンプを行ってきた。初期の8つのチーム（玉山登山隊、中央山脈冒険隊、海洋戦闘營、海浜水泳隊、落下傘訓練營、無動力飛行機營、自転車旅行隊と軍隊訪問隊）、237隊、1万余名の参加から、近年の夏休み、冬休み毎に1,000にのぼるチームで、百万余名が参加するまで発展をした。

- 85) 1974年、簡永光、陳伯安と陳盛雄の3人がキャンピング・クラブを創設し、創設半年弱で会員数は3,000以上になった。当時は戒嚴令下にあったので、集会・結社法に抵触しないよう、正式に内政部に社団法人としての認可登録を申請した。1年後の1975年10月18日に許可され、“社団法人中華

民国露營協會(The Camping Association of the R.O.C.)”が誕生した。組織としては13の県、市に支部があり、それぞれの地域におけるキャンプの普及を進めている。その他、キャンプ指導者の養成も行なっており、キャンプクラフト、技術、安全と衛生、運営などの課程を習得した18歳以上のキャンパーに対し“初級”“中級”“高級”のグレード別にキャンプ指導者の証明書を与えている。また、一般大衆に対してキャンプの広報活動を行ない、キャンプ・プログラムの改善をはかるため、キャンプに関する調査研究、キャンプ場の施設基準の制定なども行なっている。

- 86) 1991年6月9日、游祥鏗をはじめ、82世帯のメンバーによって“中華民國オート・キャンプ協會(Federation of Camping and Caravanning of the R.O.C.)”が設立された。翌年から年1回の全国オート・キャンプ大会を開催し、年間を通して毎週に土日曜日、1泊2日のキャンプを続けており、メンバー数は年15%以上という成長をみせ、現在は300世帯以上に達している。また、ファミリー・キャンプの初心者にとって、参考になる数少ない情報源である、『ファミリー・キャンプ・ハンドブック』を年1回出版している。